

連珠っておもしろい

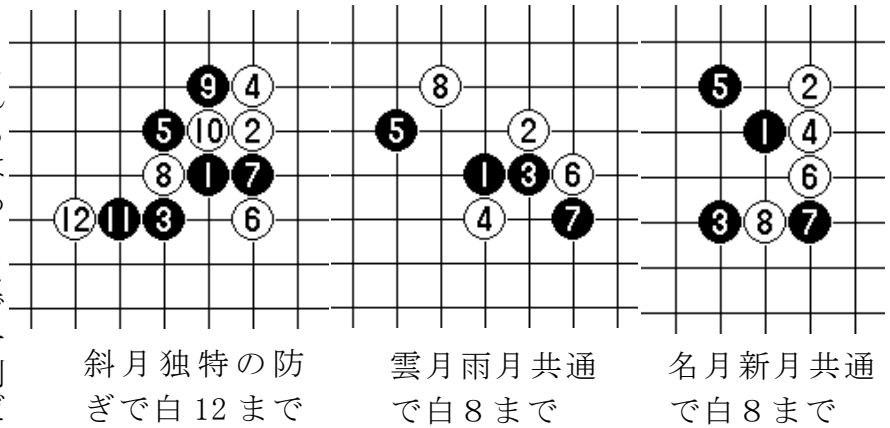
九段 河村典彦

●第18回● 新しい開局規定について

今、世界では新しいルール（開局規定）を導入すること、揉めている。日本、韓国が題数指定打ちを主張しているのに対し、ロシア・エストニアはタラニコフルール（五珠交替打ち）、スウェーデンはヨンソルル（四珠交替打ち）を主張し、なかなかまとまらない現状となっている。チーム世界戦の時会議が開催されるが、果たしてどうなるであろうか。

今日は、新しい開局規定について考えてみよう。まずは、日本が主張する題数指定打ちから。

簡単におさらいをしておくと、仮先は珠型と5珠の題数を指定するやり方である。代表的な事例を挙げておこう。

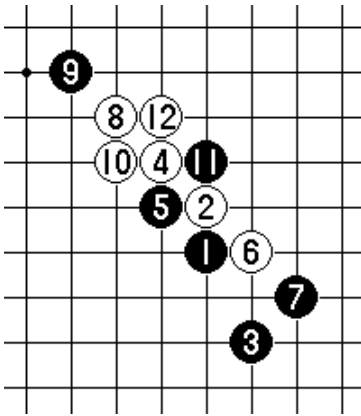


これらはあくまで一例だが、今まで見た事もない形が現れる。深くは研究できないが、おそらく互角に近い形だと思われる。だが、弱点もある。

① 珠型によっては題数が固定される。

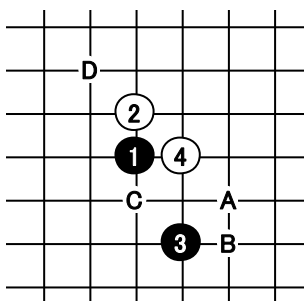
例えば瑞星は3題でも1題でも仮後が必勝である。つまり、2題しか打てない。また、長星、流星は1題、遊星、彗星に至っては1題でもなかなか打たれないであろう。

② (①と関連するが) 特殊な白4がある場合、3題が打てない
具体的に見てみよう。

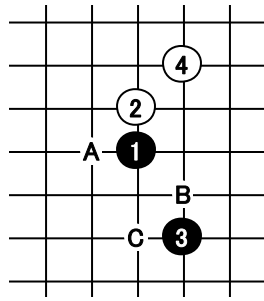


山月の白4は（共通系のない）独特の防ぎだが、黒5の3箇所目が困る。黒5は苦肉の策とも言えるが、白12まで固められては黒

は勝ち目がないだろう。さりとて、黒7を8も白10に遮られて困る。まだまだ研究が足りないので結論を出すのは早計だが、本当にこの4の3題がないとすると、山月は2題しか指定できなくなり、現行ルールと変わらなくなる。そこで、白4と題数を指定してしまおうというのが、四珠交替打ちである。

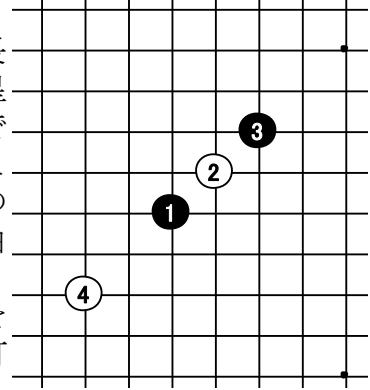


白4ならA～Dの4箇所可能なので白4で4題



白4ならA～Cの3箇所可能なので白4で3題

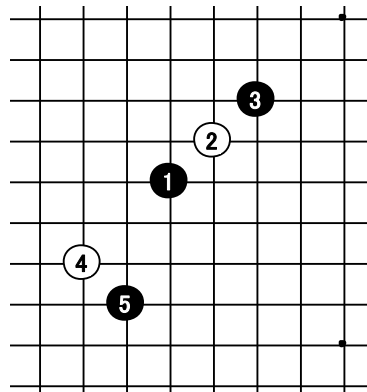
しかし、この方式にも問題がある。



長星でこの白4を打ち20題とやられたら、これはもう連珠の域を越えたナンセンスな作戦である。これを防ぐには題数の制限を用いる他ない。3題か4題あたりになるかと思うが、先程の山月でも見るように4題ぐらいが適当であろう。この四珠交替打ちを少々整備したものがヨンソソルールやソーソロフルールである。

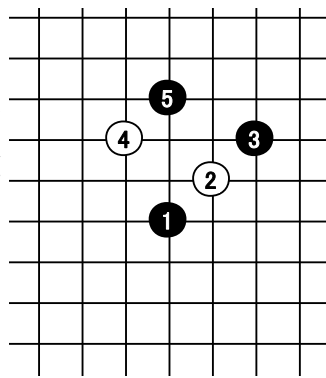
しかし、これまでのどのルールも5珠目までをいかに決めるかで黑白互角で面白い局面を考えてきた。な

らばいつそのこと5珠目までを指定してしまおうというのが五珠交替打ちである。



黒5までを指定して、黒白どちらを持ちますか？ということである。坂田さんの「均衡打ち」もこの部類である。一見合理的だが、やはり問題がある。この5まではとつびな例と思われるが、実際にはこういう局面ばかりが予想される。従来からの形になれた人なら「これが連珠か？」と思いたくなるような局面が頻出するのが一点。また、特定の形(今の5までのような)を研究しておけばかなり有

利となるため、研究合戦になつてしまふのがもう一点。また、従来の形が好きなグループと、とつびな形が好きなグループに分かれてしまふという可能性もある。一手ごとに交替権を与えて両手で5手目までを構築するのがタラニコフルールである。



同じ長星でも図のような5までならあまり違和感もなく、こういう形を造れるなら五珠交替もいいかと思うが、ヨーロッパの選手はそうではないようだ。むしろとつびな形を好んで打ちたがっているようにも見えらる。ここまで来ると「連珠とは何か？」の哲学の領域

でもある。

これまで何回にもわたり議論を重ねてきたが、日本、韓国を中心とする「三珠交替打ち」グループと、ロシア、エストニアを中心とした「五珠交替打ち」グループにはつきり色分けされてきている。この2つの妥協点を生み出すのは非常に難しい。日本が主に三珠交替にこだわるのは、現行ルールからの小ステップ変更の方が初心者にもわかりやすいというのが大きき理由である。五珠交替にこだわるヨーロッパ勢は、少しでも黑白互角の局面を作り出す事が重要だと主張している訳である。

今回のチーム世界戦の最中にRIFの会議が催されるが、その結論を固唾を呑んで見守っている。皆さんも、将来の連珠の運命を決めるかも知れないこの結末を、注目して見ていただきたい。